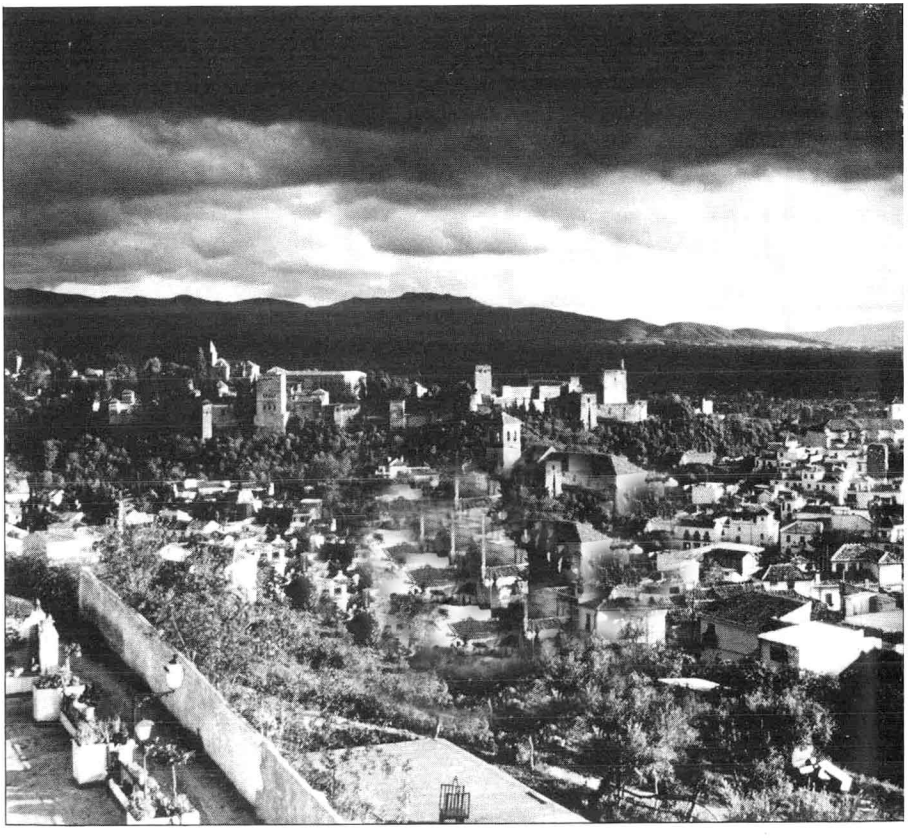
不許複製

オリーブの樹の蔭に

スペイン430日

堀田善衛



集英社

オリーブの樹の蔭に
スペイン430日
一九八〇年六月一〇日　第一刷発行

定　価　一三〇〇円
著　者　堀田善衛
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二二三〇―六三六一
販売部（〇三）二二三八―二七八一
印刷所　図書印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1980 Y. HOTTA　Printed in Japan

0095-772256-3041

目次

*

一九七七年七月～八月　夏　5

一九七七年九月～十月　秋　57

一九七七年十一月～一九七八年二月　冬　95

一九七八年三月～五月　春　185

一九七八年六月～九月　再び夏　253

*

――あとがき　318

カバー絵
本文挿絵　島　真一

扉写真　佐伯泰英

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

オリーブの樹の蔭に——スペイン430日

一九七七年七月～八月　夏

一九七七年七月十七日（日曜日）

朝から素晴しい天気である。

今日、小生六十歳の誕生日である。

その予定にして来たこととはいえ、思えば妙なところで誕生日を迎えたものである。ここは北スペイン、カンタブリア海に面したアストゥリアス地方のアンドリンという村である。戸数四十、人口二百五十人、牛も二百五十頭。漁村と聞いて来たが、海までは五キロほどあって、漁村ではなく、牧場村である。といっても広い牧場と牧場のあいだに家がちらほらという風ではなく、村として家々はかたまっていて、それをそれほどに広くはない、石垣で区劃をした牧場にかこまれているというかたちをとっている。

しかし牧場村といっても平坦一方ではなく、背後に不気味なほどに灰白色をした、七、八〇〇メートルはあろうと思われる三重の岩の山脈を背負っていて、前面の海へ向ってはまたまたぐっと岩が盛り上っていて、海面へこの岩が断崖となって落ち込み、切り立っている。その、いわばゆるい傾斜のU字型の底にこの村はあるのである。海へは岩が盛り上って断崖絶壁となって落ち込んでいるのであるから、水平線がひどく高いところに見えることになり、何か高い山、山脈と高い海との、その双方の底にいるような心地がする。

異様なところに来たれるものかな、とつくづく思う。

この村に到着して、現在のこの家を借りて住みはじめて今日で一週間であるが、家内は毎日一度は、
「なんだかヘンなところですねえ」
と言う。
借りたこの家が第一、ヘンなのだ。
それは村からちょっと離れた低い丘の上に建っているのだが、これがスペイン風でも何でもなくて、超モダンといえば聞えはいいかもしれないけれども、要するにコンクリート建ての舞台装置のような家である。階下は広い応接兼居間と暖炉と食堂、台所、物置きと便所がワン・ルームにセットされてはいるが、前者と後者は五段の階段によってへだてられ、そのほとんど中央に急な階段があって階上の二つの寝室と、バス・ルームへのぼるようになっている。階下の前面は広く大きなガラス戸で、前面の三重の山脈——というより岩脈と言いたいほどだが——と村の風景に全面開放されている。
それにしても奇妙なものを建てたものだが、これは私の友人の趣味であってみれば文句を言う筋合いではない。けれども、村の家々のたたずまいとはあまりにも異るために、通りがかる人のうちには車をとめてわざわざ見物に来る人があるのには閉口である。見物に来て、この奇妙な家から、おそらくは彼らが見掛けたこともない日本人（！）の夫婦が顔を出したりすると、彼らはまず二度びっくりで青い眼をまんまるにして、
「オーラ！」
と叫ぶ。
こうなれば当方も負けずに、
「オーラ！」
と叫びかえしてやることにしている。

五月の二十一日にポーランド船で横浜を出港し、途中、香港、シンガポール、ケラン、ペナン、スエズ・シティなどに寄港をして三十五日をかけて六月二十六日にロッテルダムに着き、その日はアムステルダムのホテル・オークラに泊った。ここでスキヤキやら寿司などを鱈腹食べたのがよくなかったらしい。夜半、家内が胃痙攣を起した。ここでゆっくり休もうかと思ったが、このホテルは新出来の、まったくのビジネス・ホテルで壁も薄く、隣室の話し声までがまる聞えで休むに休めず、パリへ出てから休むこととし、翌日午後汽車でパリへ直行する。ヨーロッパは狭い。夕刻パリ着。そうして七月四日にシトロエン社で車を受領。このとき一悶着が起る。

午前十時に来てくれということだったので早く起きて郊外のシトロエン社に行くと、これがエンエンといくら待っていても埒があかず、午後五時すぎにやっと車を受領することになる。大抵のことには我慢強い筈の小生もこれには怒りがこみ上げて来て係りの男を呶鳴りつけることになる。怒るとフランス語がよく出て来ることに、今度は自分で呆れてしまう。

車のナンバーは、7477TT75——半年有効の旅行者用赤ナンバーである。白のシトロエンGS。

パリを出るについて、E氏の世話でアルバイトの学生あがりか遊学か留学中らしい青年に運転をしてもらって、近郊のドゥルダンに到着。日本とは反対の右側交通で、パリを出ることは家内には無理なので手伝ってもらったのである。

フランスの田舎町へ到着して、やっとほっとした。私はいつの間にかパリという町が好きでなくなっていることに気付いた。

この間、七月一日に、同じくパリにいた中村真一郎夫妻、白井浩司夫妻と会食。こういうこともまず滅多にはありえないであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドゥルダンでのホテルの名は、Hostellerie Blanche de Castille（カスティーリアの白）という。縁起がいいと喜んでいると、途端に猛烈な雷鳴……。夜中にも怖ろしい雷でこのときは近くに落ちたらしく、眼が覚めた。

それから二日間、運転の練習。少しエンジンの調子がおかしいので、この町のシトロエンのガラージュ（工場）へ行くと、これがトヨタのものに変ってしまっている。

たかが新車の受領――支払いなどは東京でもうすましている――ぐらいのことに、人を七時間も待たせるようなビジネスのやり方ではトヨタにとって変られても仕方があるまい、と話し合う。

すでにヴァカンス（休暇）の季節に入っているので幹線道路を避け、フランスの田舎道を南下して行くことにし、ドゥルダンを出て、ラ・ローシュ、ランゴンと二泊してスペインへ入ったのであるが、要はわれわれも老人の組に入る年齢であるから無理をしないようにして来はしたものの、やはり疲れが出ていたようである。

ランゴンの町はガロンヌ川に沿った小さな町であり、五〇キロほど下流へ行けばボルドオなのであるが、ここで一つの事故が起きた。

この町でのホテル、〝リオン・ドール（金の獅子）〟は、ホテルというよりも旅籠というほどのもので、本命はオリヴェという、ヤツメウナギの料理で世に知られたレストランであり、ホテルの方はほんのつけ足りというほどのものである。パリのパレ・ロワイヤール広場の一角にあって、バルザックやデュマなどが通ったことで有名なグラン・ヴェフールというレストランのシェフ（料理長）であるレイモン・オリヴェ氏の紹介でやって来たものであった。オリヴェ氏の母君が経営をしている。

午後三時すぎにこのホテルに到着し、ゆっくりと休んで、夜に入ってホテルの方の貧弱さとは比べものにならず広く、かつ豪華なシャンデリアのぶら下ったレストランへ下りて行き、白葡萄酒とフォア・グラ、

それにブツ切りヤツメウナギの揚げものを楽しんでいるとき、突然家内の具合がわるくなった。彼女が白葡萄酒に弱いことは、あらかじめわかっていたのではあるが、ヤツメウナギに釣られて飲みすぎたのであったかもしれない。ボーイと二人で抱きかかえて狭い階段を上って行き、上り切った廊下の壁に彼女が額を打ちつけた。金属製の眼鏡のふちが眉の上に食い込み、思わぬほどの大量の出血を見た。

すぐに医師が来てくれて血止めの薬などを塗り、飲み薬もくれたが、この若い医師は大分酔っていて、私の顔を見ると、矢鱈と無茶苦茶な英語を使いたがり、当方はちゃんとした（と思う）フランス語を使っているのに、英語（？）で返事をする。やっとのことで彼が破傷風の心配をしているのであることがわかり、明朝病院へ行って縫ってもらうことに決まる。

その明る朝の十時に、ホテルのつい近所の綜合病院に行き、そこで女性の医師が四針ほど縫ってくれた。この手術料（？）、二八フラン（約一五四〇円）。安いものである。私どもの行き先であるスペインの医師あてに手紙を書いてくれる。親切さに感謝……。

二、三日、ここで休もうかと家内に提案をしてみたが、傷ののこることを気にしながらも、案外にけろりとしていて、スペインへ入ってから休もうと言う。

それで、右目の上に大きなバンソウ膏をつけたままで、病院から出発。

この日の朝、シトロエンの本社から電報が来て、事務の遅滞とエンジン不調の件を詫びて来る。trés désolé（大変残念に思う）と。しかし、われわれの旅程をシトロエンが知る筈はないのである。少々気味がわるい……。

正午すぎに仏西国境を越えてスペイン領へ入ると、途端に天気がわるくなり、冷雨が降って来る。フランス領内が天気がよく、非常に暑かったので、半袖でスペインへ入ったところ、これはもう寒くて閉口をした。

サン・セバスティアンのホテル・マリア・クリスティナに二泊。
大きなホテルであるが、ガラーンとしていてお客がいない。もうシーズンに入っている筈なのに、まるでお客がいない。英国人の老婆とわれわれくらいのものである。
かくて、七月十日の午後三時半に、目ざしていたアンドリン（Andrín）村に到着したのであったが、それからがまだまだ一悶着も二悶着も起る。これはまあ致し方のないところであるが、家内の疲労が心配である。
十日午後に、エウローパ五〇号と呼ばれる幹線道路を離れてこの村の村道に入り、道端で遊んでいる子供たちに、あらかじめ打ち合せてあったこの村の村長（alcalde）の家を聞くと、彼らの返事がなんとドイツ語であった。
はじめはここの村長マノロ氏の離れを借りる予定であったのが、到着してみるとマノロは古い大きな家をぶっ壊して新しい新式の家を建て、そこに同居をすることに変更になっている。ベッド二台で部屋は一杯。これでは仕事も何も出来ない、と言うと、では自分たちの応接兼居間を使えという。しかしそこではテレビが吠えたてていてどうにもならぬ。
言うまでもなく、日本人が珍しくて仕方がないので、もう村人や子供たちや、驢馬二頭と牛一頭までが詰めかけて来ていて、台所が共用であるとなれば、ここで家内が日本食の用意などをはじめたら、これはもう途轍もないことになるであろう。私がなんとも通用しがたいスペイン語の片言を振りまわしてマノロ氏と折衝をしていると——大体スペイン語が通じないだけではなくて、氏は自分は大工と煉瓦工でもあり、この家は自分で建てた、費用はいくらかかったなどと話は発展して行って、埒があかない。この話し合いのあいだに、ベッドに横になっていた家内の叫び声が聞えたので、マノロと二人で飛んで行ってみると、窓から馬が顔を突っ込んでいた。

テンヤ、ワンヤとはこのことであろう。

マノロ氏宅は即座にキャンセルすることとして、再び車に荷物を積み込んで、この村の入口のところに別荘をもつ写真家ニコラス・ミュリエル氏宅へ赴く。氏の子息とは私たちは東京で知り合っていて、この老写真家の家に隣接――といっても牛用の草場一つを距てている――している御子息の別荘をお借りすることに決める。それがこの舞台装置のような家である。

マノロ、ニコラス、それにこの村の長老パコの三氏がいろいろと住みつくための世話をしてくれる。

私がパコ爺さん（八十五歳だという）と村へ買物に行く。その間、家内はもっぱら身振り手振りである。買物は、バーを兼ねた、八百屋兼肉屋兼乾物屋兼雑貨屋兼薬屋兼パン屋兼魚屋の、アメリカ西部的ゼネラル・ストアでするのであるが、主な買物は一週一回市のたつ隣りの町のリャネス(Llanes)でするのがいいと教えられる。

ああイソガシカッタ。

夜ひどく寒いことが気になる。

しかし夜といっても夏時間制のこともあり、九時半までは明るい。

この日記は七月十七日、小生の誕生日から書きはじめたのであったが、少しさかのぼって埋めて行くことにする。

七月十一日（月曜日）

ここの天気はメチャクチャだ。晴れ上って青空が出ているかと思えば、一時間で霧、雨。また青空。変転きわまりなし。

というのも、カンタブリア海に臨みながらも、私どもの丘の上の家のすぐ眼前に、七、八〇〇メートルくらいの高さはあろうと思われる三重の灰白色の岩山がそびえたち、しかもそのすぐまた裏に二六〇〇メートル級のピコス・デ・エウロパ（ヨーロッパの尖塔）と呼ばれる嶮峻な山波が万年雪を頂いてガンバッテいるのであってみれば、海洋性気候と高山性気候とが一緒になっていて、一日のうちに何度も交替をするのであろう。海岸はリアス（潮入り川）式で、ノルウェーの峡湾（フィヨルド）のようなものもある。

変転する空を眺めて家内が、溜息をつきながら、

「ここはなんていうところなんでしょう……」

と言うから、

「これはどうも、伊那谷と三陸海岸か、ノルウェーとスイスがごっちゃになったようなところらしいぞ」

と返事。

スイスの高山と牧場のような景観に、カモメが飛ぶ。

家の横の草場に、リンゴとアンズの樹があり、小さな実が沢山なっている。すぐ下のニコラス――と老写真家を呼ぶことになった――の家にもリンゴの樹があり、バラとアジサイの花がいまをさかりに咲き乱れている。けれども、畑のトウモロコシはいまだに実が大して入っていない。やはり北緯四十三度なのだ。日本だと釧路か根室近辺にあたる。

七月十二日（火曜日）

朝、晴れ、午後、霧、雨、夕方から晴れ、夜はドシャ降り。

朝十時頃、目覚めて階下のガラス戸をあけると、下からニコラスが、ホセェ！　ホセェ！　と呼ばわっている。誰のことかと思っていると、それは小生のことであり、Yoshie はつまりは José であるからで

ある、と言う。この分ではそのうちPepeと呼ばれることも覚悟しておかなければならないであろう。家内の名はReiであるから、これはスペイン語のRey（王）であり、王は男性だから、Reina（女王）と呼ぶことにする、と言う。やれやれ……。

ニコラスが私を呼んだのには、二つの用件があった。一つは日本の選挙でセニョール・フクーダが3対2で勝った、と教えてくれるにあった。3対2とはどういう数え方であるか……。セニョール・フクーダなどに当分用はない。

もう一つの用件は、リャネスで市がたっているから行かないか、と。今日は自分の車で一緒に行ってくれることになる。ニコラスは、会話はスペイン語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ハンガリー語、アラビア語のうちどれがよいかと言い出して小生をびっくりさせる。当分は英語、順次にスペイン語ということにしてもらう。

市は実にさかんなもので、この小さな町リャネス（人口一万五千人）の広場いっぱいに野菜、果物、何かの木の葉で包んだ各種のチーズ、雑貨などの店が出ている。ピーマンやジャガイモなどは赤ン坊のアタマほどあり、その値段の安さに家内はびっくり……。小アジ半キロで、二〇ペセタである。六〇円そこそこである。同行したパコ爺さんが突然英語を喋り出して、またびっくり。ニューヨークに十五年いたが、しばらく使わなかったのでここ二、三日考えていたのだと言う。このパコ爺さんが市場の雑踏のなかから、日本人画家のH氏をさがして来て紹介をしてくれたのには、家内ともども度胆を抜かれる。この辺地でそのような人に会うとは考えてもいなかったからである。年の頃は五十歳くらいか。この町から三〇キロほど東のサン・ビセンテ・デ・ラ・バラケーラの町にも一人、O氏ありと聞く。

魚屋は別にあるのであるが、川ふちの露天商で買う。包丁は一切使わず、すべてハサミで料理してしまう、またびっくり。しかしたかがアジ風情なのに、そのウロコの大袈裟なことに、またまたびっくり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com